

弱小貴族の 異世界奮闘記

～うちの領地が大貴族に囲まれて大変なんです～



kitatu
イラスト 阿倍野ちゃこ

「試し読み版」

主な登場人物

**ハル≡
ハート**

ハート男爵家の次男。政務に抜群の才覚を持ち、ドレスコード家の文官となる。

**ミスト≡
ピアソン**

大貴族のピアソン伯爵家の三女。からかうことが大好きで、天才肌タイプ。

**クレア≡
アルカーラ**

大貴族のアルカーラ侯爵家の長女。若くして武名が高いほど武芸に秀でている。

マクベス

子爵家の従士長。金髪ロングの爽やか系イケメンだが、大柄で雄大な肉体を持つ。

**アルフレッド≡
オラール**

大貴族のオラール公爵家の長男。傲慢な性格だが、誰よりも貴族としての誇りを持っている。

**アメリカ≡
グモド**

グモド王国の第二王女。愛称はアリス。気が短くて、素直な性格。



クリスニ ドレスコード

ドレスコード子爵家の三男で、元日本人の転生者。ドレスコード家の領主となる。

ユリス=ハート

ドレスコード子爵家のメイド長。実質的に、ドレスコード家の政務を取り仕切っている。



プロローグ

「あの、馬鹿ハゲ糞兄貴どもっ！」

俺はあまりに衝撃的な置き手紙の内容に、口から溢れ出る暴言をせき止められなかった。

「クリス様、これから次期領主となろうものが、そのような汚い言葉を使うのは許されることではありません。それに、お兄様方は馬鹿でも糞でもありません。ハゲではなく、ちよっと額が広めなだけです」

声の方へ顔を向けると、輝くような銀髪で美しい顔が隠れないように髪留めできつちりとめた、10代後半から20代前半に見える女性、我が家のメイドをしているユリスがいた。

「ごめん、ユリス。言葉遣いは謝るけど、次期領主っていうのは違うんじゃないかな？」

独り言の言葉遣いなんてどうでもいいじゃないか。そういう細かいことを気にするところが、今まで結婚できていない原因だぞ。という内心とは裏腹に、面倒を避けるため、すぐに謝っておいた。

「クリス様は、先ほど手紙を読むふりだけしていたのですか？ そんな非生産的な行動がお好きなクリス様にお伝えしますと、お兄様方は王都の学者になられる故、家名をお捨てになった

結果、自動的に繰り上げでクリス様がドレスコード子爵家の跡継ぎになられるのです」

「いやいや、手紙は見たから分かってるよ！ でもね、兄さんたちも思い直して、帰ってきてくれるかもしれないじゃないか。王都の数学者なんかより、領主の方が裕福な生活ができるんだからさあ」

「まあ、一般的な領主であればそうかもしれません。ただ、ドレスコード子爵家におきましては、古くから続く名門貴族であるという以外に誇るべきものはない貧乏貴族ですので、王都の数学者の方がよほど裕福に生活できるでしょうね」

「我が家に仕えるメイド長なのに、その言い方はないんじゃないか!? 不敬罪に問われてもおかしくないよ!」

「この子爵家に仕えて10年。今や家事から政務までこなす、この美人で有能な私を排除して、子爵家が立ちいかなくなることをお望みならばどうぞ」

「ぐぬぬ……」

俺の小さな抵抗は、虚しくも言いくるめられてしまった。

確かに父は病気の療養のため、ここ数年、政務には関わらず、王都で暮らしている。そのため、実質的に政務を取り仕切るのはメイド長のユリスしかおらず、我が家で一番権力を持っているのはこの女なのだ。

「さつきからクリスマス様は、跡継ぎになりたくないような口振りですが、私の勘違いでしょうか？」

勘違いのわけないじゃないかと叫びたくなった。というのも深い理由がある。

俺ことクリスマスド레스コードは、元日本人である。

日本では、理系の大学で錆びついた青春を送り、農化学系の学科をギリギリで卒業した。その後、中小企業に入社した俺は、馬車馬ばしやうまとはこのことかと理解するくらい働かされた。

歳を重ね、自他共に認める『おっさん』となった頃には、上司には気を遣い、部下の仕事をフォローしたり、同僚の仕事を肩代わりするといった慌ただしい生活に絶望し、寝る前には『いつか田舎でスローライフを送るんだ』と妄想して眠りについていた。

そんなある日、死因は分からないが、このド레스コード子爵家の三男として生を受けたのである。

赤子となつてしまい、最初は状況が把握できずに戸惑ったものだが、今では中世ヨーロッパのような異世界に転生したと自分の状況を理解し、その生活に慣れてしまった。さらに、今となつてはむしろ前向きに、今世では忙しい生活とはかけ離れたスローライフを楽しもうと決めていた。

だというのに、この手紙だ！ 領主になれば、また忙しい生活へ逆戻りじゃないか！ ここ

は、勇猛果敢に齒向かわざるを得ない！

「そうだよ!! 俺は領主になりたくなっ…」

「い、わけありませんよね。というわけで、手紙と一緒に領主様の代替わりの書状もいただきましたので、1週間後、王城にて叙爵式に参加してきてください。ちなみに、これは決定事項ですので」

全てを言い切る前に、ユリスに口を挟まれてしまった。

「そんな馬鹿な！ 嘘だと言ってくれよ！」

俺は絶たがるように訴えたが、この女は1mmも表情を動かさず、どこか呆れたように答えた。

「諦めてください。事実です。幸いクリス様は、この10年間の私のありがたい教育のお陰で、領主としてやっていくのに必要な最低限の教養を身につけています。安心してください」

「あれのどこが教育なんだ！ ほとんど拷問だったじゃないか！ 今生きているのが不思議なくらいだよ！」

生まれた時から10年間、このドS女に教育という名の拷問を受け、ストレス解消に付き合わされていたことを振り返り、憤慨する。

この女の自称教育とは、例えば足のつかないプールに放り込まれ、沈まないように縁に掴まるたびに手を剥がされて泳がされる。勉強では毎日テストが実施されるが、テストの範囲は過

去の授業の全て。もし1問でも間違えれば、全問正解するまでやり直し。そのせいで1晩明かしたこともあった。

他にも、剣術では防ぎ方が分かるようになるまでボコボコにされ続けたり、馬術では馬を変えつつ一日中全速力で走らされたり、数え切れないほどの嫌な思い出が脳裏に焼きついている。ダメだ、次から次へと辛い思い出がよみがえってきて、目元が濡れてきた……。

「拷問とは心外です。愛故にです。クリス様は、強制しないと楽するじゃないですか。むしろ私の教育した成果が、領主として最低限の能力を与えただけになってしまったのは、クリス様の責任です。謝ってください」

「……ごめん」

謝りたくないのに、つい謝ってしまった。

「分かればいいのです。それでは領主になっていただけますね？」

「はい……」

こうして、俺は領主になってしまったのであった。

1章 ドレスコード家の領主になるということ

凹凸が激しい踏み固められただけの、道と言っているのかもしれない粗悪な道の上を馬車は走っている。車輪が1周するたびに大きく上下に揺れて、硬い木でできた椅子が俺の尻に深刻なダメージを与える。

今、俺は叙爵式のためにに王都へ向かっているのだが、我が領は王都から離れており、その道のりは一苦勞なのだ。

ついでながら我が領は、北部にアルカーラ侯爵の山岳地帯、東部の高原地帯にピアゾン境界伯領、西部にはオラール公爵の領地が接しており、中継地点として利用されるので、運送業と街道は発展している。

そのため、街道が整備されている領内では移動する機会がなかった俺は、初めての領外への移動の不便さに辟易していた。

「なあ、ユリス。もう領外に出て10日目だよ。こんなに領の政務をほっぽり出してるのは、まづいんじゃないかな？　もう帰ろうよ。叙爵式は王都の兄さんに任せて。ね？」

一縷の望みを託して、どこから仕入れてきたのか、隣でふっわふわの大きなクッションに身



を預けているユリスに提案してみた。

クッションは黒い光沢を放つ毛皮に覆われており、ユリスをのみ込んでしまおうかというほど沈み込んでいる。なんとも柔らかかそうで高価そうであった。

「クリス様、大丈夫です。ちゃんとある程度の雑務の引き継ぎは部下にしてみましたから。それに長旅も、ゆっくり寝られて悪くないではありませんか？」

そう言つて、ユリスは眠たげな目を猫が顔を洗うようにこすつた。

「そりゃこんな環境でも、そのふつわふわのクッションさえあれば寝られるんだろうけど、ないと寝れないんだよ！ 振動はすごいし、床は硬いし、めちゃくちゃ疲れるんだよ！ っていうか、そのふつわふわのクッション、どうしたの!? 一介のメイドが手に入れられる代物じゃないだろ！」

「クリス様、誰が子爵家の財政を握っているか、お忘れですか？」

「横領してるのか!？」

「冗談です。横領なんてするわけじゃないじゃないですか」

絶対に冗談じゃないよね!？」

いつもと変わらない表情で、さらりとすごいことを言つてのけたユリスは話を元に戻す。

「まあ、オラール公爵領を抜きましたので、もう王家の直轄領です。もしかしたら、今日明日

中には、着くのではありませんか？」

「それなら我慢するよ……」

何はともあれ、この地獄の旅もようやく終わるようである。俺は安堵のため息を漏らした。

「さて、クリス様。今から、叙爵式における礼儀作法の指導をさせていただきます」

は？ 何を言っているのだろう、この女は。

「ははは！ 礼儀作法なんて、もう嫌というほどやったじゃないか。もうやらなくていいよ」
軽く笑い飛ばした俺に対する返事として、人を殺せそうな視線が返ってくる。

それから王都に着くまでは、一睡もできなかった。

「クリスッドレスコードを第15代ドレスコード子爵に任じる。これからも王家のために忠節を
尽くしてくれ」

「ははあ。ありがたき幸せ！」

つてな感じで叙爵式は呆気なく終わってしまった。さすがに中身がなさすぎるとは思うが、
実際、王と謁見した時間は3分程度で、ただ一言戴いた後には、あっさりと帰されてしまった。

こんなにおざなりな感じでもいいのだろうか？ 謁見の間には、王と護衛の兵士だけだったし。
帰り道、王城を完全に抜け出し、跳ね橋を通り抜けた所でユリスが待っていた。形式上はメイ

ドであるユリスが王城に入るのは難しいので、城外で待つてもらっていたのだ。

ユリスと合流し、高くそびえ立つ城壁を背景にして、王都の城門からまっすぐに伸びる大通りを歩く。道の両側には立派な店が立ち並び、たくさんの人が行き交っていた。榮えているのは間違いないが、道幅に対して人の群れは疎らであつた。隣で凜として歩いているユリスに、先ほどから感じていた疑問を尋ねてみる。

「ユリス、聞きたいことがあるんだ」

「何でしょうか？」

「叙爵式にしてはなんかシヨボかつたんだけど、これって舐められてるのかな？」

「それには2つ理由があります。1つ目はドレスコード子爵家が舐められているから。2つ目は王家が舐められているから」

衝撃的な内容だというのに、ユリスはぶれることのない表情で淡々と答えた。

「いや、我が家が舐められているのは薄々気付いてたけど、王家も舐められているの？」

「驚きました。他家に舐められていることに、クリス様が気付いているとは……」

「まあね。メイドに当主が舐められているくらいだからね」

「世の中、少しおちゃめなメイドもいるものですね」

「本当に極悪で悪魔の化身のようなメイドがいるものだよ」

互いの顔を見つめ合いながら、静寂の時間が流れる。俺が根負けして視線を下に落とすと、ユリスは口を開いた。

「まあ、見ず知らずのメイドの話は置いておきまして、今の王家には力がありません。今、王家は王宮内で宰相たち文官と王族の方々が権力争いにかまけており、非常に混乱しています。たかが子爵家の叙爵式のために王家に近づきたくない領主たちがほとんどで、王家も叙爵式にかけるお金はないといったところでしよう」

王家には何の力もないじゃないか！ これじゃあ諸侯を抑える力もなく、戦乱の世の中寸前ってこと!?

その後も王家についての話を聞いていくと、10年以内には王家が滅び、群雄割拠の時代になることは間違いなさそうだ。このままじゃ大貴族に囲まれている我が家は格好の獲物なのでは、と危機感を覚える。

「ユリス……もしかして、うちって危ない?」

「ギリギリまでクリスマス様にお仕えして差し上げますね」

今まで見たことのない優しい顔で、ユリスは俺にそう告げた。

何、その優しい笑み。ギリギリまでって、もう滅ぶことを確信しちゃってるじゃん……。

「まあ、それは置いておきまして、クリスマス様、こちらをどうぞ」

話を切り替えたユリスから、ターコイズのような水色をした、一目で美しいと分かる小さな寶石がはめ込まれた指輪を渡される。

全然、置いておける気持ちにはならないが、反射的に受け取ってしまう。

「クリス様。これがドレスコード子爵家の宝具でございます」

「これが、うちの宝具か!？」

さっきの暗い気持ちはなんのその。俺は年がいくもなく、いや今の年齢なら年相応な声を上げてしまった。現実から目を背けたい気持ちが無自覚に出た結果かもしれないが、ついはいやいやでしてしまうのも無理はない。

宝具とは、各貴族に1つ存在し、その貴族の血族が身につけると魔法を与えられる『やはり、ここは異世界なんだなあ』と再確認できるファンタジーな道具なのだ。

だけど、あまりにも簡単に引き継ぎが終わったので、疑問を覚えた。

「え? 引き継ぎってこんなにあっさりしているの? せめて父上は?」

「先代様は、家から出るのがダルいとおっしゃられましたので、クリス様が叙爵式に出ている間、言伝ことづてと共にお預かりして参りました」

俺は啞然とした。父上は、もともと怠惰なところはあったが、一生に一度のこの重要な時まで来ないなんて。

これは、俺に期待していないのか。それとも信頼の証だと受け取ればいいのか……。

「それでは、先代様の言伝をお伝えいたします。『ユリスに任せれば大丈夫。ユリスに逆らうな』とのことですよ」

ユリスへの信頼かよ！ どんだけ自領のことをユリスに任せてたんだよ！ ユリスはただのメイドなんだぜ!?

しかし、父上の言伝は的を射ており、ユリスに従うしかない。もはや領主になってしまったからには、子爵家を支える有能なメイド長をギリギリまで逃さないようにしなければならぬ。「父上の言葉はしかと受け取ったよ。これからは領主としての僕を支えてくれるかい？」

「そんな、いや、いきなりそんな、でも私も、いや身分だって、あのクリスマス様が……」

突然、ユリスは真赤になって身悶え始めた。普段は見られないユリスが可愛いような怖いような。勘違いさせてしまっている気がするけど、面白いのでこのままにしておこう。

それはともかく、魔法だよ、魔法！ 転生してからずっとユリスの拷問を受けてきて、異世界を満喫できてないんだ。絶対に魔法を使ってみたい！

「魔法ってどうすれば使えるの？」

逸る^{はや}気持ちは抑えて、ユリスの顔の赤みが引くのを待つてから尋ねた。

「ドレスコード家の宝具では、あらゆる形の石を創り出せる魔法が使えます。どのような石か

想像して指輪に願えば、石を創ることができると先代様がおっしゃってました」

早速、ユリスの言葉に従い実践する。

立方体の石をイメージし、指輪に願った。すると突然、指輪が光り出し、イメージ通りの石が目の前に現れた。

すっげえ！ なかなかいい魔法じゃん！ 巨大な岩を飛ばせば、相手がどんな軍でも倒せるじゃないか！ 俺TUEEEできそうだ！ この魔法を駆使して生き残って、早いうちに領主を隠居して、スローライフを送ろう！

魔法が使えた喜びと、将来に光が見えた嬉しさから、自然と笑みがこぼれた。そんな浮かれる俺に、ユリスは冷たい言葉を投げかける。

「喜んでらっしゃる様子ですが、大した能力ではありませんよ。石は手の届く範囲にしか出せませんし、大きさも1mほどにしかありません」

「えっ？ でも、さすがに数は出せるよね？ てか、石っていうからには、宝石とか鉱石とかも含まれたりする？」

「いえ、重ければ重いほど、数が多ければ多いほど体が疲れますので、数は出せません。それに、宝石や鉱石が出せれば、もっと栄えていますよ」

は？ 全然使えないじゃん。

「それじゃあ、父上は何に使ってたの？」

「我が領ですが、街道だけは立派だと思いませんでしたか？ あれは、先代様の魔法で、毎日こつこつと創り出された石で整備されました。まあでも、それ以外に使っているのは見たことないですね」

使えねえ。異世界の魔法といってもこんなもんかよ……。

「貴族の魔法ってこんなじゃないの？」

「まあ、大概の貴族はそんな感じですが、我が家の周辺の貴族の魔法はすごいですよ。アルカール侯爵家は、自由に強風を起こせますし、ピアゾン伯爵家の五感強化の魔法で強化された軍は、王国一だと言われております。また、オラール公爵家は、近くの生物の時を奪うことができる魔法です」

なんてバケモノたちに囲まれてるんだ、我が家は！ 滅ぼされないようにするには、どうすればいいんだ!!



叙爵式を終えて王都から自領に帰った後、これから我が家が生き残るにはどうすべきかにつ

いてユリスと話し合った。

結論として、当たり前ではあるが、戦う力をつけなければいけないということになった。戦わずに済むように行動するつもりだが、戦乱の世になれば弱いところから順に狙われる。このセオリーからすれば、真っ先に狙われるだろう。

戦争になった時には、いつ攻められても大丈夫なように、各貴族に抗える統率された常備軍が欲しい。だが、常備軍を維持するには莫大な資金が必要だ。

その資金を得るには、普通の産業をしているだけでは到底間に合わない。この世界はいまだ中世ヨーロッパのような文明なので、俺の少ない現代知識を絞り出して新たな産業を興せば稼げるだろうが、産業を興すにも金がないのだ。

取りあえずは、初期投資が少なくして済む商売を進めていくしかない。

早速、我が家の御用商会であるサザビー商会を訪ねた。

「サザビーを呼んでもらえないか？ 少し話がある」

店に入って近くにいた店員に声をかけると、店員は丁寧な返事をしながら店の奥へと消えていった。しばらくして、青髭の目立つ男が現れ、陽気に声をかけてきた。

「これはこれはクリス様ではありませんか？ 本日はどういったご用件ですか？」

「やあサザビーさん、久しぶりですね。今日は商談がありましたね」

「あのクリスマス様が商談とは立派になりましたね。わたくし感激いたしました！ ささ、奥へどうぞ」

乾ききっている目元をぬぐうふりをしたサザビーは、奥の扉を開けて中の部屋へと案内してくれた。部屋に辿り着くと「少しだけお待ちください」と言われ、サザビーは部屋から出て行ってしまった。

部屋の中には、大きなソファーが対峙する形で備えてあり、辺りには高級そうなオブジェや絵画が飾ってあった。昔はこの部屋に入れてもらったことがなかった。今回は俺を子供だからと侮らず、取り引き相手として認めたわけだ。これは気を引き締めないと、と意気込む。

「いやあ、お待たせしてすみませんねえ」

帰ってきたサザビーが、ヘラヘラと詫びの言葉を告げた。

悪びれているような口調じゃねえだろと多少イラつとしたが、何の連絡もなしに突然来たのだから、出かかっていた言葉は呑み込んだ。

「早速ですがクリスマス様、商談とは？」

「買ってもらいたいものがあるって、いくつか持ってきたんですよ」

見てくださいと言いながら、縦と横に複数の直線が引かれた板と、表と裏が白と黒に分かれた石を靴から出した。

「これは何ですか？」

「リバーシです。これは、こうやって遊びます」

怪訝な顔をするサザビーに、俺は遊び方を説明した。すると、サザビーは途中から真剣な表情に変わり、何度か頷いていた。俺が説明し終えると、サザビーは胡散臭い笑みを浮かべる。

「なるほど。これは面白い。娯楽に飢えた庶民や貴族に対して、広く売れるでしょう」

おお！ さすがネット小説の内政モノで定番のリバーシ。なかなか好印象だ。

「それでは、買い取っていただけですね？」

「いや、買い取るには少し条件があります」

「条件？」

「はい。これは、誰にでも作れる商品です。専売にはできませんので、利益が小さくなります。ブランド化してドレスコード家の印をお借りする方法も考えましたが、それもおそらく偽造されます。または、その印から偽造印を作り出し、悪用される恐れがあります」

サザビーの言う通り、利益が小さくなるのも、偽造印を作られるのも困るな。

「ですから、クリスマス様にこの白と黒の石を同じ大きさで大量に作ってほしいのです。そうすると、絶対に偽造できませんので、ブランド化することができ、さらに原価がないので安定した利益を上げることができます」

なるほど。それなら上手くいきそうだ。魔法を使って作るのは面倒くさいけど、仕方ないか。代わりに条件を出してやろう。

「その条件のみましよう。しかし、それでは俺の負担が大きすぎる。売り上げの5割は僕がもらいます。」

「いやいや5割は取りすぎですよ。こっちは人件費やらリバーシのルールを広めたり、貴族に売り込みに行ったりしないといけないんですから。2割でお願いしますよ」

「そうか2割か。じゃあ俺は他の商會に持っていくことにします。これにて」

こんなベタベタな台詞で釣れるかなと思ったが、心配をよそにサザビーは慌てた様子だ。

「わ、分かりました。断腸の思いですが4割にしましょう。これ以上は無理です」

「仕方ない。4割で手を打ちましょう」

合意するとサザビーの顔に安堵の表情が見えたので、もう少しいたのかもしれない。まあ、4割ももらえれば充分だろう。

「売れましたら報告をしに参りますので、楽しみにしてお待ちください。今日はよい商談でした」

「あ、ちょっと待ってください」

立ち上がるサザビーを俺は引き止め、自作の麻雀とチェスを鞆から取り出すと、サザビーは

青い顔をしてこつちを見た。

その後もサザビーに、なろう系御用達のトランプや将棋も渡してはみたが、一度に複数は広められないので、前払いとしてある程度の契約金をもらい、取りあえずこれらの遊戯系統のものは、リバーシ発売後に同じ価格で取引することに落ち着いた。

サザビー商会から領主館に戻ると、ユリスが門の前で馬の轡ふちを引いて落ち着かない様子たずで佇んでいた。

「どうしたんだいユリス、こんな所で？」

声をかけるとこちらに気付いたようで、手綱を引き、黒くて大きな愛馬をトコトコと歩かせながら歩み寄ってきた。

「取引の方はどうでしたか？」

「ああ、上手くいったよ」

「それは僥倖きやうじやうですね。それでは、これから領内の探索に出かけましょう」

いつもと同じ無表情だが、少し弾んだような声だと感じる。

「帰ってきたばかりで疲れてるんだ。少し休ませてくれ」

「ダメです。領内を探索する時間が減るじゃないですか」

なんでこんなにやる気があるのだろう。いつもなら「領内の探索なんて疲れることできない病にかかっているので無理です」とか言ってくるのに……。

まあ、やる気があるのはいいことだから、なんでもいいや。

「分かったよ。それじゃあ僕の馬を用意してもらえるかな？」

そう要求すると、ユリスはキョトンとした。

「ここにいるじゃないですか？」

「はあ？」

目の前にいるのは、間違いなくユリスの馬だ。黒○号みたいなやつなので、見間違えるはずがない。ということは、まさか！ ユリスが馬つてことか!?

いつもあんなに人を虐げているのは、自分も虐げてほしいことの裏返しか！

仕方ないな。そんな趣味はないが、ユリスの誘いに乗るのも主人の仕事か……。

「馬だというのなら、まずは四つん這いになってヒヒーンとでも鳴いてもらおうか！ この牝馬が！」

「はあ？」

ユリスが呆れているように見える。

さすが普段からドSを極める女だ。この程度では足りないと言いたいのだな。

よからう。それならば俺が本気で罵ってやる!

「この雌○○○○が!! ○○○の○○○○突っ込まれて、頭が○○○○の○○○○になって、言葉も分からなくなつたのか、この……ぶへえっ!」

見えない速さで拳が飛んできた。脳が揺さぶられたのか、視界がグラグラと歪む。

「クリス様。次に不用意なことを喋ると灯火ともしびを消します」

と、灯火……。命の!?

「すっ、すみませんでしたあ! 馬が1頭しか見えなかつたので、早とちりをしてしまいました。どこかにもう1頭おられるのでしょうか?」

「馬は1頭ですよ」

「俺は走れと!」

「私と乗ればいいじゃないですか」

ユリスは目を合わせずに頬を染めて言った。

……可愛いやんけ。

冷たい風を切つて、少し上り坂になっている街道を馬に乗って進んでいた。

のどかな野原と青空に浮かぶ大きな白い雲は、目の前をのろろと横切ろうとしている。

(うちは、町以外は本当に田舎だなあ)

我が領を大きく分類すると、宿場町兼交易都市と、その周りを囲むようにある大規模な農地、そこから南部にかけて閑散とした農村が点々と存在し、最後に遠浅の海に面した漁村があるだけだ。領内の収入は、都市によるところがほとんどを占めている。

今回の視察では、交易都市以外で収入になりそうなものを探す、または創り出し、なろう作家御用達のノーフォーク農法への移行を浸透させることを目的としている。

「もうそろそろ農村ですよ、クリス様。何かよい案は考えつきましたか？」

真後ろから綺麗ですっきりとした声をかけられると、こそばゆさでゾクリとし、それでもつてどこか気恥ずかしさを感じた。

「いきなり声をかけないでよつ、ユリス！ほんとにほぼゼロ距離なんだから！」

「失礼しました。クリス様がそんなに敏感な方とは思いませんでした。でも、仕方ないんじゃないですか。クリス様では、私の馬が歩いてくれないのですから」

そうなのだ。ユリスの巨軀の愛馬は、俺が手綱を握ると1mmも動かず、ユリスが手綱を握ると巨体に似合わずリズムカルに軽い足取りで歩を進め始めるのだ。

「じゃあ、ユリスが前に乗ったらいいだろ！俺の後ろから手綱を引くのは無理があるんじゃないか？」

「いえ、全然無理はありません。私の黒帝ちゃんは賢いので、手綱をそんなに操作する必要はないですから」

「いや、たしかに手綱はゆるゆるだけど……」

「では、問題ありませんね。無駄口を叩く暇があれば、領内の地形でも必死で覚えてください」
「いやでも、そんなにくつつく必要はないのでは？ 手綱が余って、大きく垂れちゃうくらいなんだし。まあ、俺的にはユリスの絶望的な胸が、この距離でやっと感じられたことに幸福感を得られたからいいんだけど。」

そんな中身の無い話をしていると、農村が見えてきた。

「やっと着いたよ。案外遠かったね。馬上の旅は疲れるよ」

「そうですか？ 私はあつという間に感じたのですが、クリス様は長く感じられたと。そうですか……」

うわっ！ なんかユリスから黒いオーラが感じられるっ！ 心なしか黒帝も鼻をブルブル鳴らして怒っているかも。フォローしないと！

「いや、僕が長く感じられたのは、年齢のせいだと思うんだ！ 僕はユリスよりも年下なんだから、ユリスが短く感じて僕が長く感じられたのは普通だよ！ 普通！」

「そうですか。クリス様はそういうことをおっしゃるんですね……」

うっ、余計にオーラが大きくなって。フォローしたつもりが逆に怒らせてしまったか!?

「ごめんっ！ そんなつもりじゃなくて！ ただユリスが後ろでくっついてきているもんだからドキドキして、時間が止まったかのようだったから！」

俺がさらに取り繕うと、黒いオーラは収束して、逆に満開の花が飛んでいそうなほど、パーツと明るいオーラが出たように感じられた。

「そうですね。それなら仕方ありませんね。あと、女性に年齢の話を持ち出すのは不躰ぶしつぱなので、二度としないようにしてくださいね」

「は、はい」

なんとか乗り切ったようだ。ホッと胸をなでおろす。

そんなやり取りを終えると、白鬚と歳の割に引き締まった身体が目立つ老人が出てきた。

「おお、ユリス様とクリスマス様ではありませんか！ いつまで経ってもお変わらないようので安心しましたぞ」

「久しぶりだな村長。お前こそ、その筋肉が衰えてなくて驚いたぞ」

この男はここら一帯の農村を取り仕切る村長で、子供の頃から面識があり、ちよくちよく顔を出している。それに、俺の名前より先にユリスの名前を出しているあたり、村長には珍しく領内の事情に通じている賢い男なのだ。

「はっはっは！ ユリス様に許可いただいた通り、開墾に開墾を重ねておりますからなあ！」

「……ユリス。ここら一帯を開墾しているなんて話、聞いたことないんだけど」

「そうですか。では、お伝えいたしました。それで何か？」

「いや、領主の許可とかあるじゃないか？」

「私が管理してますのでいりません。それよりノーフォーク農法とやらをお話ししてください」

「はい……」

ユリスの行動を問い詰めたのが地雷を踏みそうなので、村長にノーフォーク農法を説明して移行を求める。

「うーむ……それは失敗した時のリスクがあるのじゃ。上手くいかなければ儂らは飢え死にですぞ」

腕を組んで悩む村長に、ユリスが声をかける。

「上手くいかなければ食料を支援します。それに成功すれば、少ないですが報酬も出しますよ
う」

すると、村長の顔に笑みが浮かんだ。

「そこまでおっしゃるのであれば、やぶさかではないのう。かしこまったのじゃ」

「あと、何かここら一帯で育ちそうな作物とかないかな？」

村長は渋い顔をして唸りながら……

「あるのはあるのじゃが……まあ、クリスマス様に一度見てもらおうかのう」

そう言って村長は一度家に戻ると、ささっと何かを持ってきた。

「これは道に迷った旅人が置いていったのじゃが、食べたものが酷い腹痛に苦しんだのじゃ。しかし、試しに畑に植えると非常によくできるのじゃ」

村長が差し出した物は、所々窪んでゴツゴツした丸い芋であった。

「これは、ジャガイモじゃないか！ 村長、これを村々で作ろう！」

「しかしクリスマス様、このジャガイモとやらは毒があつて食べられないんじゃない」

「いや、こいつは芽に毒があるだけで、それ以外は食べられるんだよ。火と油、塩を用意してくれ」

「はあ。しかし、それを食べて腹を壊してしまえば、明日からの生活に支障をきたすかもしれない。ませぬのじゃが……」

村長は怪訝な顔をしながらも、どこか期待するような目で見てくる。

「分かったよ。腹痛を起こした人がいたらお見舞金を弾むことにするよ」

「いやいや、決してそんなことはないと思うのですが、万が一ということもありますからのう。それでは採りにいって参りますぞ！」

金の話をすると、急に嬉々として道具を取りに向かった。まったく現金なジジイだ。

そして数分後、村長は両手に抱えた鍋と共に、たくさんの村民を連れてやってきた。村民も各々が塩や油を持ち、どこか嬉しそうにしている。

「いやー、採って参りましたぞ！ たまたま村民が暇をしておりましたので、皆連れて参りましたのじゃ」

絶対たまたまじゃねえだろ。人数分のお見舞金が目当てだろう。

「まあ、いいや。早速料理するよ。ユリス、手伝ってくれないか？」

「仕方ないですね。クリス様との共同作業というのめやぶさかではありませんし、手を貸してあげましょう」

ユリスに手伝ってもらいながら、蒸かし芋とポテトチップスを作った。それらを村民たちが持ってきた木の皿に入れる。そして、匂いにつられて群がってきた村民と村長に渡した。

「どうぞ食べてください」

村長は真っ先に受け取り、おずおずと手に取って少しだけ食べた。すると、目を見開いてガツガツと食べ始める。

「確かに、これは美味しいのじゃ！ ポテトチップスとやはらぱりぱりとして塩気が効いてて、蒸かし芋とやはらぱりぱりで美味しいのじゃ！」

その他の村人たちも村長に感化されたのか、次々と受け取り、同じように美味そうに食べる。「これでジャガイモの有用性が分かりましたよね？　これから、この村や他の村にジャガイモを栽培することを広めてください」

「分かりましたのじゃ！　こんなによくできる作物が美味ければ、バンバン育てていきましょうぞー！」

よし。ひとまず農村部の改革はこれでいいかな。

「それでは、明日また様子を見にきますので」と言って、ユリスと二人乗りで密着しながら帰っていった。翌日、腹痛のふりをする大根役者が村で溢れたのはまた別の話。

リバーシなどのアイデアを売り、ノーフォーク農法への転換、ジャガイモの栽培を促した日から1カ月ほど経った。

その間、何か資金を得られる方法はないかと前世の知識を振り返っていたところ、学生の頃に蒸留の実験をしたことを思い出した。蒸留酒は領内の特産品になると思いつき、サザビーに作らせていた。そして今、完成した蒸留装置が子爵家の工房に鎮座している。

蒸留装置の構造としては、加熱するための釜の上に花瓶のような形の大きいフラスコが据えられ、冷却菅と呼ばれる細長い管のついた蓋を被せてある。また、冷却菅を包むような箱が取

り付けられ、その箱には水を流して冷却菅を絶えず冷やしている。冷却菅の先には、出てきた液体の受け皿を担う容器が設置されていた。

そんな装置を眺めながら、ユリスに蒸留装置の原理を説明した。

「クリス様の説明で理論は理解できました。物質の沸点の差を利用されるのですね？」

「その通りである、ユリス君！ まあ見たまえ！」

学生に実験を教える教師はこんな気持ちなのかと優越感に浸りながら、意気揚々と作業に取りかかった。

「蒸留酒を作る予定だったんですが、酒を手に入れられなかったので、香水を作ります」

「さっきからなんですか、その口調。ものすごく不愉快なのでやめてください」

「は、はい」

面倒なものを見るような視線をぶつけてくるユリスが怖かったので、一気に先生気分が冷めてしまい、黙々と作業を進める。ミントの香りがする草を潰して乾燥させておいたものを、金属製のフラスコに入れて水蒸気で加熱する。加熱してしばらくすると、冷却菅の出口から水滴となつて受け皿の容器へと滴る。そして、水滴の入った容器を蒸留装置から取り外し、出てきた液体の匂いをユリスにかがせる。

「すごいですね。少しキツイですが、よい香りがしますね。貴族相手に高値で取引できそうです

す」

ユリスの言う通りなのである。

この世界は中世ヨーロッパの世界によく似ており、あまり石鹼が浸透していない。風呂に入る文化もほとんどないので、香水は非常に重宝されるに違いないのだ。

もちろん俺は毎日風呂を沸かして入っているので、香水は必要ない。金はかかるけど貴族だからね。特権だよ。まあ、俺が沸かした風呂にはユリスが先に入っていて、そのあとに入ったことしかないんだけど……。

ともかく、先祖代々働いている信頼できる職人に蒸留技術を秘匿するように金を握らせ、蒸留酒と香水の製造を任せよう。



サザビー商会を通した蒸留酒と香水の取引で莫大な利益を生んだ。資金を得たことで大胆に政策を行おうと思ったのだが、人が足りない。金ももう少し欲しい。

そこで、楽市楽座と関所撤廃をしようとユリスに提案した。

「意図は分かりましたが、商人の反発は関所を撤廃することで抑えるとしても、税を納めさせ

るには売り上げが正確かどうかを調べる仕組みと判断できる人間が必要です。まあ、確かに人口は増えるでしょうが、そのぶん治安が悪化してしまうでしょう。この交易都市は3つの大貴族領の流通の場であるのに、大貴族の御用商会の不正を追及できるでしょうか？ それに、治安が悪化して、ここでの交易を見直す動きが出れば、この子爵領はお終しまいですよ」

た、確かに……。

「まあ、幸いなことに三家の大貴族の実力は拮抗していますので、不正をすれば他の二家の貴族が裁くでしょうから、治安の維持さえなんとかなれば実現可能かもしれませんね」

「なんだ、それなら簡単だよ！ 我が家の私兵30人に治安の維持をさせよう。ユリス従士長のマクベスを呼んできてくれないか！」

「そこまで言うのならばそうしますが、私はお止めしましたからね？」

「うん？ 大丈夫大丈夫！ 毎日ユリスの訓練をこなしてる兵士たちなら余裕っしょ」

ユリスは嘆息して執務室から出ていくと、すぐにノックの音がした。

「入っていいよ！」

「従士長マクベス、参りました。今日はどのようなご用件でしょうか？」

執務室に入ると、マクベスは丁寧な言葉遣いで尋ねてきた。端麗な顔に似合わない、傷だらけの立派な体軀を縮めている。表情もどこか怪訝そうなどころを見ると、なぜ呼び出されたの

か分からず、不安に思っているのだろう。

「一つ頼みごとがあるんだ」

「はあ。頼みごととは？」

おずおずとこちらを伺うマクベスに、楽市楽座と関所撤廃、そしてそれに伴う治安の維持を説明した。

「なるほど。かしこまりました。しかし、治安の維持をしていたら、ユリス様の訓練を続けることはできないのですが……」

「そうか。では治安維持と訓練を2つのグループに分けて行ってくれ」

「ということは、これからは今までの半分の訓練でいいと？」

マクベスは、どこか期待したように見てくる。

「まあ、自然とそうなるな」

「よっしゃあああああああ！！！！」

マクベスは、勝ち鬨を上げるかのような歓喜の叫びを狭い室内に響かせた。

お、おう。そんなに喜ぶなんて、さすがユリスの訓練だな……。

「はっ!? 取り乱しました！ それではこのことを伝えに行つて参ります！」

マクベスはふと我に帰り謝罪したが、それでも嬉しさを心のうちに収めきれないのか、スキ

ツプしながら執務室を出ていった。



領主館の執務室で、やっと最後の1枚となる書類を仕上げた。

完了の解放感に浸りながら伸びをすると、窓からカーテン越しの光を感じ、そこで一晩中仕事をしていたことに気付いた。

仕上げ終えた書類の山が光を遮断し、短くなったろうそくの明かりが気付かせなかったのだ。「もう、こんな時間か。こんな生活も今日で何日目か分からないや」

なんで、こんなことになったんだろう。

時を遡れば1年前。楽市楽座を開始すると、みるみるうちに税金収入が増え、それに伴って人口も爆発的に増えた。

その上、蒸留酒やリバーシなど子爵家の商品の需要も増し、莫大な資産を得た。

しかし、人口の増加に伴う戸籍の登録や納税手続き、法整備などのアホみたいな量の仕事を子爵家の文官だけでは支えきれなくなった。文官を募集しようとしても、この時代の教育水準では文字を読めるものを探すのにも一苦勞で、結局、自分が寝ずに働くという選択肢しかなか

ったのだ。

それに、最も大きな原因は、1カ月前にユリスが痺れを切らし、実家に帰ってしまったことである。

俺はみっともなく縋りついて引き留めたが、ユリスは「大丈夫です、クリス様。文官として優秀な兄と弟がいますので、調きよ……説得して連れて参ります。ご安心ください」と言っ出ていってしまった。

ユリス、早く帰ってきてくれないかなあ……と神に祈っていたその時、ドアをノックする音が聞こえた。

「ユリスか!! 入ってくれ!」

期待を持ってこちらからドアを開けたが、そこにいたのは、目の下を真っ黒にし、死んだ魚の目をしたマクベスだった。

「すみません、クリス様。俺です。マクベスです」

「ああ、マクベスか……。何の用だ?」

「クリス様、さすがにもう治安維持の方も限界です。訓練する時間と寝る時間をけずって働いていますが、領内の人が増えすぎて物理的に無理です。普通の通りならまだしも、スラム街が形成され始めて、その取り締まりができません」

マクベス率いる子爵軍は、ユリスの訓練を耐え抜いた精鋭中の精鋭だ。さらに俺に施したほどではないが、ユリスから最低限の教育は受けている彼ら30人が治安維持に精を出せば、大抵の街の治安なら維持することは不可能ではない。

そんな彼らが泣きつくほどということは、相当追い詰められているのか……。

「ああ、治安維持についても考えてるよ。スラム街の人や職にあぶれた人を公務員として雇い、治水工事や警察隊、清掃業務につけようと考えている。ただそうすると、今まで稼いだ莫大な利益がほとんどなくなってしまう。それに、これはユリスの案で、ユリスが帰ってこないことには実行できない。すまないがユリスが帰ってくるまで持ちこたえてくれ」

俺は地面を見ながら肅々とした口調で答えた。

「そ、そうですか。それでは仕事に戻りますので……」

明らかにマクベスは肩をガツクリと落とし、部屋から出ていった。

少し経って、もう一度ノックの音が聞こえた。マクベスで気を落としたためか、今度は許可だけ出して座っていることにする。

「入っていいよ」

ゆっくりドアが開く。

「お待ちせいたしました、クリスマス様」

「ユリス！」

俺は思わずユリスに飛びついた。

「もう、ユリスがいないとダメなんだ。もう、離さない！ 頼むからもういなくならないでくれ」

これでやっと仕事ができるし寝られる！ なぜか目から汗が止まらなかった。

「ふふっ、いいんですよ。もっと私に依存……頼っていただいても」

もう、依存って言っちゃってるけど、気にならないや。ちょっと怖いけど、ユリスも嬉しそうに笑ってるし。

「我が妹は、子爵も飼いならしているのか……」

「家の外でも女王様は変わらさずですか。恐ろしいですね……」

声が聞こえて、ユリスの後ろに冴えない顔をした無精髭の男と小柄で華奢きゃしゃな青年がいます。声にやっとなつてきた。

「忘れていました、クリスマス様。紹介いたします。兄のハルと弟のジオンです。兄は王宮で文官の幹部として働いておりました、弟の方は天才設計技師として名声を博し、治水技術にも優れています」

まじ!? そんなすごい人たちが来てくれるなんて！ それに、ユリスの家系はどうなってい

るんだ？　すごすぎるだろ。ビバ遺伝子。

「はじめまして。ドレスコード子爵領の領主、クリスⅡドレスコードです」

「これは、ご丁寧に。俺はハルⅡハートといいます」

「僕はジオンⅡハートと申します。これからよろしくお願いいたします」

「ああ、よろしく頼むよ。確認だけど、本当にこの領で働いてもらえるんだよね？」

まあ、無理って言っても逃さないんだけど。っていうか、今さらではあるけど、苗字を持っているってことは、ユリスの実家は貴族だったのか……。

「俺に、妹に逆らう勇気があれば働かないんだけどな」

「はは、兄さん。勇気があっても同じだよ。逆らった人たちがどうなったか知ってるでしょ？」

どうなったの!?　知りたいけど、知らない方がいい気がする。

「愚兄愚弟、お黙りなさい。クリス様が少し怯えてらっしゃるじゃないですか。冗談もほどほどにしないと引っこ抜きますよ」

何を!?

「まあ、なんだ。妹に逆らえないのは本当なんだが、俺は王宮の派閥争いに辟易^{へきえき}して、弟は自分よりできない上司の設計通りに進めるのが耐えられないらしい」

つまり、全部が全部、無理やりってわけでもないのか。

「そうか。ではよろしく頼むよ。明日からユリスの計画を進めるから、この冊子を読んでおいてくれ」

これでなんとか状況を打破できればいいが。

その後、ユリスの計画を実行した。

治水工事関係はジオンに任せ、清掃業務と警察隊をハルに担当してもらった。

はじめの頃は上手くいかなかったが、警察隊による取り締まりが強化されていくにつれ、スラム街はみるみるうちに消えていった。ただ、増えていく公務員の対処にハルやジオンの仕事量は増していき、立派なブラック会社の社員のようになっている。

また、子爵軍はユリスの訓練に全部振ることになり、とても落ち込んでいた。哀れなり。

治水工事では、俺の魔法で石材を大量に出して、それを用いて防波堤を築いたり、水路を整備したり、水門を作ったりしている。

人件費がめちゃくちゃかかるから、材料費ぐらいは節約しないとね。てか、魔法の使い方、こんなんでいいの……。

そして、今日はその治水工事の視察に来ていた。辺りには、キラキラと日の光を浴びて輝く川を中心にして、重そうな石材や木を運んだり、組み立てたりしている、ガタイのいい労働者

が沢山いた。

そんな労働者とは毛色が異なり、設計図を片手に指揮している、線の細い銀髪的青年に声をかけた。

「現場の指揮まですまないね。ジオン」

「いえ、なかなかやりがいのある仕事なので、自ら指揮を執って完成させたかったです！」
ジオンは見るからに疲れ切っていたが、目だけは輝いていた。

「そうか。まあ無理はしないようにね。それにしても、防波堤は立派なものができているし、水門もよくこんなものを作れたな」

「ありがとうございます。まあ、自慢になりますけど、これだけのものを作れるのは僕ぐらいですよ」

「さすがだな。この後はどうする予定なんだ？」

「はい。この辺りの風の強い地形を生かして風車を建てて、大規模な干拓をしようと思つています」

「ああ、以前俺が思いつきで言ったやつか。実際にできそうなのか？」

風車を利用しての干拓は、農地を確保し、食料増産を目的とした案ではあったのだが、当時は人も金もない状況である。なにより非常に難易度の高い工事を行える技術者がいなかったの

で、諦めていた。

「工夫すれば確実にできると思います」

本当にできるのか。すげえな。有能すぎだろ。

「さすがだなあ、ジオンは。やはりハート家の家系は優秀だねえ。というか、俺はハート家について全然知らないのだけど、教えてくれない？」

「はい。自分で言うのもなんですけど、ハート家は、過去に將軍や宰相も輩出している名門です。幼い頃からスパルタ教育を受けるため、みんな優秀なんですよ」

「すごいね！ でも、なんでそんな家の娘であるユリスが、うちで働いているんだ？」

ジオンは苦虫をかみつぶした顔になって、口を開いた。

「姉はハート家の中でもずば抜けて優秀で、武術も学術も優れています。容姿にも恵まれている上に、王都の学院も史上最年少の8歳で卒業という快挙を成し遂げたため、やんごとない方々に欲されたのですが……」

「ですが？」

「あの性格ですので、行く先々で相手を激怒させたり、号泣させたりして、断られ続けました。唯一あの性格を受け入れられたのが、プライドのないドレスコード子爵家だったです」

「……」

俺は、とてつもなく微妙な気持ちになって、黙り込んでしまった。



ある日、勢いよく開いたドアと共に銀髪の男が駆け寄ってきた。

「クリスマス様、もう限界だ！ やってられねえ」

「いきなりどうしたんだ、ハル？」

「日に日に仕事が増えていくじゃねえか！ 人を増やしてほしい！」

「この前、追加の文官を雇ったばっかじゃん。それに、これ以上僕に雇う伝手つてなんてないんだ」
この前も細い伝手を辿ってなんとか採用できたのだが、ただでさえ希少な文官を採用するこ
とは非常に困難を極める。

「クリスマス様。今はまだなんとかなっているかもしれないが、そのうち首が回らなくなってくるぜ」
いまだに人口は増え続けているため、必然的に文官だけでなく、さまざまな人材が足りなくな
っている。

人材の育成が必要だな。

「そうだ！ 私塾を開こう。孤児や従士を対象にして、子爵家で働くことを条件に授業料を無

料にするんだ」

「私塾か。学校を建てるなら面倒なしがらみがあるだろうが、あくまで個人の私塾という形にすれば運営は容易にできる。運営費の方もなんとか捻出できるにしても……塾の先生はどうする？」

「ああ。それは最近暇そうなユリスにしてもらうよ。ハルが来てくれたおかげで、ユリスが暇になっているからね」

「いや、なら妹の仕事を増やしてくれよ。文官足りないんだから」

「ユリスにやらせる度胸を持ち合わせている人っているの？」

「……俺が悪かった」

ハルが悲しそうな顔をして謝罪した。実の兄ですら妹になにも言えないようだ。

「まあ、それも大きな理由なんだけど、ユリスはドレスコード子爵家の家庭教師をしてきた実績があるから。実際、兄貴たちはユリスの教育のおかげで学者になったからね。間違ってもユリスの教育という名の拷問を他人にも味わってもらいたいか、そういうのじゃないから」

「絶対そういうのだろ……。まあ、妹には文官としての仕事もあるんだから、私塾には代わりの人間も用意しておいてくれよ」

「ああ、分かった。取りあえず子爵家の従士の中で交代から派遣するよ」

その後、設立された私塾では、ユリスのスパルタ教育と、従士たちのユリスの訓練に対する腹いせのスパルタ訓練によつて、優秀ではあるがひねた性格の塾生が大量生産されたのはまた別の話。

「私塾の件はいいとして、俺は即戦力の文官が欲しいんだよ！」
唾を飛ばしながらまくしたてられてもなあ。

実際あてがないんだし、寝ずに働けというしか……はっ!? 今俺は、現代日本で自分がされて苦しんだことを人にさせようとしていたのか？

「すまなかつた、ハル！ 俺が間違つていた。今すぐ文官を探そう！ だが、あてがない！ 採用する方法を一緒に考えてくれ！」

「お、おう。急に熱くなつたな……」

「ああ！ 俺は大きな間違いをしていた！ 俺はそういうのから逃げてスローライフを送りた
いんだ！」

「そ、そうか。まあ、なんでもいいけどよ。俺だつて考えなしに言つてるわけじゃねえんだ。
こいつを見てくれ」

そう言つて、ハルは一枚の手紙を差し出した。封をしている蠟ろうには大層な印が刻まれており、
やたらと高級そうな手紙である。何の手紙だろう？

「この手紙は？」

「開けたら分かると思うが、おそらく社交会の手紙だ。しかも、王家の印がしてあるから、王家主催のものだろう。腐っても王家だ。ほとんどの貴族が来ることになる。そこでコネをつかって紹介してもらおうか、文官を引き抜いてきてくれ」

手紙を開けると、第2王女15歳の成人記念パーティーと書いてあった。



弱小貴族の 異世界奮闘記

～うちの領地が大貴族に囲まれて大変なんです!～

kitatu

イラスト 安倍野ちゃこ

試し読みはここまで
続きは書籍版でお楽しみください

書籍情報はこちら

http://books.tugikuru.jp/detail_kizoku.html